

## 9

## 醍醐寺三寶院の庭園

京都市伏見区

醍醐三寶院の庭作りは、戦国時代に荒廃した寺の復興をめざして、慶長三年（一五九八）からはじめられました。この年二月、豊臣秀吉は醍醐で花見を催す準備のため三寶院を訪れ、そこで秀吉自らが庭の縄張りをおこなったと、当時の日記は伝えていきます。作庭作業の実際は四月からはじめられましたが、まず庭の中心に置かれたのは、以前から名石として有名だった藤戸石（ふじと）という石でした。

この作庭作業で中心的役割を果たしたのが、なんといっても河原者と呼ばれて強い差別をうけていた人たちでした。その河原者のなかでも、庭作りなど庭のいろいろな作業に携わる人は、とくに庭者と呼ばれていましたが、藤戸石が置かれる前日には、仙という名前の庭者が記録の上に登場しており、六月になると、さらに与四郎を中心とした兄弟三人の庭者が登場します。兄弟は伏見の太閤御所においても作庭に携わっていましたから、いわば秀吉お気にいりの庭者だったのですが、彼らの作業は庭作りのなかでも、とくに石を立てるとか橋を架けるとかの、かなり大がかりな作業をとこなうものでした。

その後、慶長七年（一六〇二）二月十一日になって、庭者賢庭（けんてい）の名前がはじめて記録の上に登場します。賢庭が登場するのと

入れ替わるように、それまで活躍していた与四郎の名前が記録の上から姿を消すため、賢庭と与四郎を同一人物とみる考え方もありますが、現在のところはつきりとしたことはわかりません。賢庭は庭作りにおいては、当時「天下第一」の評価を得ておりましたが、彼の庭作りにおける才能は、とくに石組などにおいて発揮されたようで、それは滝の石組を作り、蓬萊島（ほうらいじま）を築き泉水の橋を架けるなど、規模が大きく、組織的な作業をとこなう仕事に従事していたことからわかります。

彼のこうした才能は、十五世紀に庭作りで活躍した著名な河原者善阿弥（ぜんあみ）に連なるものであることは、まちがいないでしょう。三寶院の作庭作業は一六二〇年代に入ってもおこなわれていますから、かなりの長期間にわたったのですが、その骨格となる部分は、このように与四郎・賢庭といった中世以来の系譜をひく庭者によってつくりあげられたのでした。

賢庭の後、一七世紀後半以降からは庭者が作庭に関係する事例がみえなくなり、町人身分の人たちが作庭に進出するようになります。江戸時代の厳しい身分制の下、差別を受けた人たちがそうした作業のなかで、重要な役割を担うことができなくなっていたからでしょう。

（川嶋将生）



京都市伏見区醍醐寺三宝院

**メモ**●醍醐寺は真言宗醍醐派の総本山で、山号は深雪山。三宝院は永久3年(1115)に創建された塔頭で、醍醐寺五門跡の一つでしたが、いくつかある醍醐寺の寺々のなかでもっとも大きな力をふるった寺でした。三宝院へは市バス「醍醐」下車、拝観料500円。参考文献に『日本庭園史大系』8「桃山の庭」、竹村俊則『昭和京都名所図会』6巻があります。